報　告

大学入試センター試験における外国語リスニング・テストについて

1　検討の経緯

(1)　大学入試センターでは，平成6年4月から施行された新しい高等学校学習指導要領を受けて，平成11年度からの大学入試センター試験（以下「センター試験」という。）に外国語のリスニング・テストを導入できるか否かを検討してきた。（平成9・10年度センター試験では，新・旧両教育課程に対応した経過措置を講ずるため，導入するとしても平成11年度を想定）

この検討は，平成6年8月に主として設備・技術上の観点から検討を行う「大学入試センター外国語リスニング・テスト調査検討委員会」を設け，使用する機器の在り方や音響上の問題点等を専門家の立場から審議するなど，平成9年3月まで行ってきた。

(2)　高等学校教育への影響を考えると，センター試験でリスニング・テストを実施することの重要性は十分認識しているが，一方でセンター試験は，60万人近い受験者がそれぞれ環境の違う約530の試験場，約9,500の試験室で全国一斉に受験するという特質を持っているため，公平性の確保や円滑かつ安全な実施といったことの見通しが立たなければ，実施に踏み切ることができないことである。

(3)　リスニング・テストの実施方法については色々な方法が考えられるが，現時点で一般的であると思われる次の方式を中心に検討した。

①　試験場に備え付けの放送設備により，スピーカーから問題を流し聴取させる方式

②　CDプレーヤー，MDプレーヤーなどの機器を個々の受験者に持たせ自ら再生させ，イヤホンで聴取させる方式

2　検討の結果

これまでの検討結果を現時点で整理すると，次のような問題が挙げられる。

(1)　1－(3)－①の方式について

①　センター試験の試験場となる大学の多くは，放送設備が整備されていないのが実情で，実施するためにはすべての試験室に整備する

ことが必要となるが，そのためには膨大な経費を要する。

② 騒音に影響されやすく，全国の様々な環境下にある試験場・試験室を同一の条件に保つことが極めて困難である。

③ 英語，ドイツ語，フランス語及び中国語の4科目を実施するとなると，それぞれ試験室を分けなければならないが，高等学校の施設を借用するなど，試験室の確保に苦労している大学が多く，それらの大学では対応が困難である。

(2) 1－(3)－②の方式について

① 試験室を増やさなくても4か国語を実施できるメリットがあるが，いまだ大学の個別学力試験や高等学校の入学試験で実施されたことのない方式であり，いきなりセンター試験に導入することは，予測し得ない様々な事故が発生する可能性がある。

② 何十万という機器を実施者側で用意するためには膨大な経費が必要となる。

③ 機器の保管・管理及び品質管理が極めて困難で，試験実施要員の増員が不可欠となる。

④ この方式では，受験者の聴取状況を監督者が確認できない。受験者から聞こえなかったとの申し出があった場合，再現性のない事故の場合にはそれを確認する方法がない。

3 結 論

センター試験の実施についての重要事項は，おおむね2年前に決定し，受験者に周知することを慣例としているため，平成11年度の導入の是非を平成9年度に決める必要があり，平成9年6月5日付けの「平成11年度大学入学者選抜に係る大学入試センター試験出題教科・科目の出題方法等について(通知)」で平成11年度センター試験では，リスニング・テストは実施しないことを大学及び高等学校等に通知した。

近年の機器の開発は目覚ましく，将来，安価で操作が簡単な機器が開発される可能性もあるが，これまでの種々の検討を総合的に勘案すれば，平成11年度以降当分の間はセンター試験にリスニング・テストを導入することは，困難であるといわざるを得ない状況にある。